

[研究ノート]

中学校・高等学校における美術鑑賞教育のための素材研究 —剪紙 窗花を素材として その1—

Material Research for Art Appreciation Education in Junior High School and Senior High School —Chuang-hua in the Jian-zhi part. 1—

高橋 愛
Ai Takahashi

〈抄 録〉

本稿では、中学校および高等学校の鑑賞教育のための素材として、中国民間美術における剪紙をとりあげる。いくつかの種類に分類される剪紙のなかでも、代表的な「窗花」に注目し、その定義付けや歴史についての基礎的知識をまとめていく。

キーワード：中国民間美術、剪紙、窓花、鑑賞教育

Abstract

Chinese paper-cutting: Jian-zhi is one of China's folk arts. Chinese paper-cutting for window decoration is called "Chuang-hua". Chuang-hua is representative of Jian-zhi.

This is a report on material research for art appreciation education in junior high school and senior high school.

Keywords: Chinese Folk Arts, Chinese paper-cutting, Jian-zhi, Chuang-hua, Arts Appreciation Education

1. はじめに

筆者はこれまで、美術科教育における鑑賞教育の対象として、中国の民間美術のうちのひとつである剪紙についてとりあげてきた。そのなかで、日本の「きりがみ」や「きりえ」と共通性があることを述べてきたが、本稿では、それらとは異なる視点に目を向けてみたい。中国の剪紙に「窗花」(そうか。中国語読みは chuāng huā)という種類がある。「窗」の文字は、現代の日本ではめったに見られなくなったものの漢字辞書には「窓」の正字として記載されていることが多い。ここでわかるように、「窗花」

は「窓花」である。字が示すように、窓に貼付ける剪紙の呼称である。

現在、日本の教科書では「きりがみ」がとりあげられているものもある。表現活動のひとつであるが、できたものを窓に貼っている様子が紹介されている場合がある。その他、きりがみ関連の書籍では、モビールにしたり、メッセージカードの模様としてコラージュしたりなど装飾方法のひとつとして記載されているものが多い。しかし、そもそも日本のきりがみは、窓に貼るという用途の歴史は浅い。一方で、中国の剪紙は古くから窓や壁に貼付ける習慣があった。

この特徴的な「窓花」について明らかにし、今後の中国民間美術についての鑑賞教育研究に発展させていきたい。

2. 剪紙と窓花について

(1) 剪紙のなかの窓花

「窓花」について触れる前に、その大本となる「剪紙」について拙稿¹⁾をもとにその概要を再度説明したい。中国の民間美術のひとつとして知られる剪紙は、日本では「きりがみ」や「きりえ」の分類で知られている。主として鋏・小刀・間透などの刃物を用いて、手漉きの紙や洋紙に種々の形を切り抜いたり刻んだりする、手作りの工芸品である。図柄は多種多様であり、作風や技法も地方によって異なる。その歴史はさだかではないが、紙の発明以前より存在し、祭祀用として、あるいはまじないや縁起担ぎのために作られていた。その他、工芸品の図案や刺繍の下図などに使用されていたが、やがてはそのもの自体、確立した工芸品として受け継がれ、広く民衆に愛好されるようになっていった。

その剪紙は、別名「窓花」とも呼ばれるが、実は剪紙には複数の種類があり、窓花はそのうちのひとつである。「1. はじめに」に述べたように、筆者はそれまでに「剪紙」の教材研究に着手してきたが、剪紙の分類項目については深く触れてこなかった。剪紙には、用途や制作方法等の違いによる種別項目がある。まず用途によって、貼付け（装飾）用、贈り物の飾り付け用、刺繍の型紙用、染め物の型紙用と大きく4分類される。さらに「窓花」「礼花」「鞋花」「門箋」「斗香花」など、種類別に分けられる。また地域によっても特徴があり地域ごとにも分類されることもあり、研究者によって種類別や地域別の分類方法や呼称は若干異なってくる。このように、現段階では剪紙の分類を断定して説明するのは難しい。

そのようななかでも窓花は、研究者を問わず一定して分類の位置づけに確固たる地位を築いている。多種多様に分類される剪紙を教材化するには剪紙の特徴をより深く理解する必要があり、本稿では、なかでも特に認識度の高い窓花をとりあげ、その第一歩としたい。



図1 剪紙



図2 窓花

(2) 窗花の定義

① 剪紙のなかの窗花とその派生

では実際に「窗花」とは、いったいどのように定義されているのか。「窗花」の書籍は多数存在するが、辞書的意味と剪紙研究家の解説にてその定義を確認してみる。たとえば美術辞典では次のようになっている²⁾。

剪紙：一種の民間伝統工芸品。漢時代はやくに、民間婦女が金銀箔と布を使用して方勝³⁾や花鳥の形に切ってもみあげに貼付けて装飾にするスタイルがあった。のちに発展し、祝祭日に色紙を用いて各種の草花や動物あるいは人物故事などを切って、窓に貼ったり（「窓花」と言う）、まぐさに貼ったり（「門箋」⁴⁾と言う）する飾りとして作り、礼品装飾あるいは刺繍模様を用いるために作るものもある。……（後略）……

次にある剪紙研究家の一文⁵⁾を見てみる。

……（前略）……南朝の宗懐の『荆楚歳時記』の記載によれば、毎年正月初七日は人の祝日で、この日は多くの特別な活動を行って「人日」を祝った。人々は門や室内に提灯をつるし五色の布で装飾し、高いところに登って詩を作るだけでなく、色絹を切って様々な人の形にし、もみあげの髪に貼ってお祝いを示した。この日に多くの家庭では彫った金銀箔を屏風と窓に装飾するのを好んだ、その目的は気候がよく作物が育つことやすべてがうまくいくことを願うためである。これら祭日の活動が窓花芸術の基礎を形成した。この切り彫る芸術は民間風俗と一緒に融合して、民間剪紙の発生と発展の基礎を固めた。

つまり、窗花は祭事や願掛けの風習と結びついて発展していることから、「窗花は民間剪紙の代表である」とよく言われることもわかる。しかし、髪飾りとしての用途があったことも明白であるが、その風体は不明である。文献資料はもちろん、テレビドラマや映画などで放送される漢から唐時代を描いた時代劇でも筆者はまだ確認できていない。

② 薄い材料から紙へ

現在、剪紙と言えば、「紙」で作られたものを指すが、もともと紙は貴重なものだったゆえ、民間で使用されるようになってからの年月はまだ短いほうだろう。紙の普及率から想定して、農民レベルの民間まで、紙が波及するのは清時代あたりであろうか。

後漢時代に蔡倫（生没年未詳）が紙を改良し、紙の普及のきっかけとなるが、それでもまだ紙は腐りやすく長期保存は難しく、考古上最古の剪紙を発見するに及んでいない。現時点で発見された早期の剪紙は、新疆の古墓から出土されたものであり南北朝時代のものとされる。李命成は、要約すると次のように続ける。

「剪紙の発見されたアスターナ墳墓はシルクロードの交差するところであり、南北朝時期には経済産業の発展をみせた。蔡倫の紙改良後、200年余りたち紙の質が向上していることと、この時期に金銀の箔片の彫刻技術が急速に発展したこと、シルクの裁断や布を押し染めするなどの工芸と密接に結びついたこと、これらのことが発掘された剪紙のような創作方法の基礎固めとなった」とみている⁶⁾。

そして紙が発明され絹帛、木簡・竹簡の代わりに宮廷で記録用として用いられるようになり、のちに宋・元・明時代に出版が盛んになってもまだ上流階級を中心としてしか紙は使用されていない。清

の時代になっても紙の使用は儉約されていたこともふまえる⁷⁾と、「紙でつくられた」剪紙自体が、そもそもは上流階級のものであったといえる。

つまり、『荆楚歳時記』の記述と合わせてみると、南北朝時期に一般的には、紙を材料とした剪紙は一般的には作られておらず、布などの薄い材料が用いられ、アスターナ墳墓から出土した紙の剪紙は希少であると考えるのが自然であろう。

加えて李命成の言葉から紙との視点以外の関連性がみえてくる。剪紙の紋様が染めの型やその他漆工芸品などに使用された模様形態と類似していることの原因がよくわかる。そこには「紋様」という共通点が見出せるが、ではそれらとは違った用途、装飾の一部に発展した剪紙の窗花にはいったいどのような意図があるのだろうか。

3. 窗花と空間住居の窓について

デザイン性や祈願としての意味合い以外の窗花について、二つの見解を本稿では明らかにしたい。教養技芸との関連、窓の発達との関連である。

①たしなみとの関連

剪紙は女性の教養技芸として存在していた。現代の剪紙作家である上河内美和は、主に農村の女性たちによって伝えられてきたものとし、自身が剪紙に興味を持ったきっかけとなる話を紹介している。

「中国では昔、特に女の人にとっては、切り紙は花嫁修業のひとつだった。今でも田舎に行けば、普通のおばあさんが切り紙を作っているらしい⁸⁾。ここで、「昔」とはいつを指すのか、作家が北京に留学していたものどこでだれからこの話をきいたのかは明確ではない。

しかしながら、この記述は意義深い。中国の宮廷の様子を描いた歴史ドラマでは、妃嬪や宮女が剪紙を作る場面がときおり描写される。たしなみとして習う場面ではなく、紋様を切ることはできて当たり前のように振るまわれる。つまり、妃嬪や宮女として宮廷に入るには、身につけておかなければならない技芸であったようだ。

唐代では未婚の女性は刺繍や剪紙を学ぶことが必修であり、明清代になると宮中の宮女たちは皇后や妃嬪の世話をする間の余暇に剪紙にはまることがあった⁹⁾、という情報もあることから、少なくとも女性の教養技芸であったのだろう。

この見解を確認するために剪紙が民間におよぶまでの経緯についてみていくと、李命成の『剪窗花』には次のように示されている¹⁰⁾。

南北朝より下って宋代になると、商品の流通が発展をみせ都市の生活を潤すようになる。同時に工芸品の技術も発展を遂げ、宮廷芸術は「上がやれば下もまねする」ようになり、民間芸術は豪族社会に入り込んでいった。周密(1232~1298)の『武林旧事』によると、杭州では剪紙は「小経済」となり100種類に達し、図案を考える民間剪紙芸人がすでに出現していたそうである。このことは剪紙芸術史上重要な現象であり、次世代へ継承されていくきっかけとなっている。この時期の剪紙芸術の発展には二つの要素がある。ひとつは剪紙が民間に流布し農村地域にまでも及んだこと、もうひとつは剪紙が宮廷芸術家と貴族階級の観賞物であり剪紙の多様化をうながしたこと、である。

整理すれば、宮中や貴族など上流社会で流行し愛でられたものが、時代を経て民間に伝わり、農村

まで普及していったということである。もともと農村などを含めた民間の女性のたしなみであったものが、宮中へ伝わり発展したのではないことがわかる。その広がりには、上述の李命成の話にあるように、経済や産業の発展、他種の工芸品の普及など様々な要因が絡んでいたことも明確である。

②窓との関連

そしてもうひとつ取りあげたいのは、居住空間の潤いと上級階層への憧憬のあらわれとしての窗花である。まず、上述の教養技芸に関する記述と合わせて、窓についてと窗花の言葉についてみていく。

模様のある窓、透かし窓は、「花窗」と呼ばれる。中国の故宮をはじめとして、庭園や貴族の館に行けばお目にかかれる。換気や採光といった実用的な機能よりも、絵画をみるような視覚的効果が重点となる。窓の形態は、丸や四角が多いが、その模様はいわゆる「縁起物」である。

叶柏風の『窗式』によると、中国の窓について、古代から漢代をその形成期とし、その後の窓の発展については唐代以降として紹介している。古代に建物に窓が出現してのち、漢代までは基本的には格子窓が一般的である。唐代において建築は大規模となり、窓は基本的には格子形式をとっているが、装飾的要素が見え始めた時期でもあった。宋代になると『营造法式』という建築技術全般について詳述した専門書が刊行され、設計や施工だけでなく、建築各部分の装飾についても記載される。窓の形式が多様化し、装飾も華麗になっていく時期である。

明清時期には、膨大な形式、様式が存在し窓に関する多数の実例が見られるほどになる(図3、4)。装飾は複雑になり、模様だけでなく彫刻が施されるようにもなる¹¹⁾。宮廷や貴族の屋敷をみると、装飾性は時代が下るごとに華美になっていき、明清時代のものもはや実用性という点は無視されると感じるほどである。



図3 明代(上海、豫園)



図4 清代(北京、頤和園)

加えて、「窗花」という言葉に注目してみる。「花」という字は、単純に植物を指すわけではなく、模様、柄、図案を示す言葉でもある。使い方によって、花や模様などで装飾されたものを指すこともある。「花」の意味を把握してから「窗花」を捉えなおすと、窓を装飾するものそのものを示すことが明白となる。

以上のことから、窓に貼る窗花、これは祈願を含有させた装飾でもあるが、日常に華やかさを加える装飾でもある。窓の形態が格子状で簡素であった時代、おそらく、剪紙を貼ることで窓に変化をもたらし、また窓から差し込む光が室内で美しい影となって映ったことであろう。時が下ると建築様式に発展をみせ窓の様式も美しくなっていた。「花窗」の誕生である。それは、上流階級の生活のことであり、下層社会、農村を含めた一般民衆の生活居住空間の窓が同様に豪華絢爛になったとは現

存する民衆の住まいをみても考えにくい。

「花窗」が発達し、明清代に代表される宮中や貴族屋敷の窓のその美しさや豪華さは、複雑で細かいデザインにあらわれており、その窓には剪紙は不要になったであろう。一方で、相変わらず格子状の窓を有する民間の住居空間では、窓を華やかに彩る要素が必要であったかもしれない。紙や工芸品などの普及にともない、窓の装飾としての剪紙は民間に広まることにより、民間の中で生き残り根付いていったのであろう。かつて、上流階層の室内で親しまれた紙による窓の装飾と影の芸術は、民間人の楽しみともなった。なぜ窓に貼るのか、その答えの一つがそれにあてはまると考える。

剪紙のなかの窗花には、上流社会への憧れや生活の向上を願う気持ちが込められているのではなかろうか。欲望を表出させるよりも隠す傾向にある日本人ではなく、貪欲に富貴や幸福を求めることを素直に表現する中国人であるからこそ、それを具現化しやすい剪紙は民間において継承されてきたのではないか。

表 剪紙・窗花・窓に関する事項の時系列

時代	○剪紙 ●窗花	窓	その他
古代		形成 基本：格子窓	
漢			紙の発明 布で方勝
三国			
南北朝	●『荆楚歳時記』：窓への装飾(窗花の基礎) ○現存最古の「紙」の剪紙 ○工芸品との結びつきの可能性(紋様)		
唐	○未婚女性の必修得技術	若干の装飾的要素	大規模建築
宋	○『武林旧事』：多様化、民間剪紙芸人 ○民間へ流布	『营造法式』：形式の多様化	出版物の隆盛
元			
明	○宮女たち余暇に作成	多種多様の形式、様式	
清			

4. おわりに

日本のきりがみやきりえと共通点のある剪紙だが、日本のそれにはない、窓に貼る、という独特な行為にはどのような意味があるのか、これを追求することが今後の大きな課題である。本稿では、文献を基に、窗花についての定義を確認しつつ、その変遷についてみてきた。また、そこから読み取れる吉祥祈願以外の窗花に対する意識を推測してきた。

そこから紙の波及、その他生活に欠かせない布や工芸品との関わりが剪紙の発展に関与していることは当然のことながら、建築(窓)の発展との関連性をみていくことで窗花を別な視点で捉えることができた。つまり、建物、居住空間の変容をみていくことは、窓に貼るといふ窗花にしかない要素を歴史的、意識的な変化からみていくことにつながる。

これらの見当をさらに明らかにしていくには、今回見えてきた推察を証拠づける資料、また髪飾りとしての様相を示す資料の検索と分析が必要である。

剪紙をみていくことは、同時に紙文化の発展をみていくことでもある。紙が発明され、記録や絵画

以外の用途として工芸品と関連があることを示すことができる。土や金属の文化と比較し、紙の文化はまだ歴史が浅い。それをどのように鑑賞の授業でとりあげていくかを考察することも課題の一つでもある。

中学校や高等学校での鑑賞教育では、美術作品そのもののよさを味わう、日本の美術作品との共通・相違を捉えるだけでなく、それらが誕生した背景を知ることも必要である。生活を支える工芸品、そこには過去と現在と未来がある。なぜ我々は、伝統工芸品をはじめとした伝統文化を保護し継承していかなければならないのか。その答えは、生徒自ら考えねばならない。教師として伝えられることは、その答えをそれぞれが出していく手だてとなる基礎的知識のみである。アジア特有の文化を自分なりに捉え、考えていく能力を身につけるきっかけともなりえよう。

注

- 1) 高橋愛 向野康江「中国の剪紙作品を対象にした鑑賞教育教材研究」『茨城大学教育実践研究』第22号、茨城大学教育学部附属教育実践総合センター、2003年、105～118頁。
- 2) 邵洛羊 主編『中国美術辞典』上海辞書出版社、2002年。左記美術辞典には、窗花そのものの説明はなく、剪紙の説明の中に記載があり、本文中の引用はその箇所の意識となる。
- 3) 方勝：原文では「方胜」。方胜は、菱形を横に重ねた形にしたものであり、それを装飾に用いる。模様そのものを指す。
- 4) 門簾：原文では「门帘」。
- 5) 潘鲁生 主編『剪窗花』河北美術出版社、2003年、3～4頁。
- 6) 李命成『剪窗花』潘鲁生 主編、河北美術出版社、2003年、5～6頁の要約となる。
- 7) 清の雍正帝（1678-1735）は、質素儉約に努め宮廷費用をおさえたとし、そのひとつに紙に関するエピソードがある。保存用などの公文書をはじめとした重要書類以外は、自ら紙の裏面も使用したとされる。
- 8) 上河内美和『福をよぶ中国の切り紙「剪紙」』誠文堂新光社、2008年、5頁。
- 9) 中華文化天地 民族編 剪紙「剪紙の歴史和藝術」
URL：http://edu.ocac.gov.tw/culture/chinese/cul_chculture/vod26html/vod26_01.htm（アクセス：2014年）
- 10) 李命成『剪窗花』、同上、7～9頁の要約となる。
- 11) 叶柏风『牖以为室一窗式』上海科技教育出版社、2007年、3～11頁。

参考文献

- 田永翔、冉凡『壺流河畔的点彩窗花』文化科学出版社、2009年。
林秋芳 主編『故宫100皇帝的寶藏』香港商雅凱電腦語音、2012年。
李薇 主編『中国传统服饰图鉴』东方出版社、2010年。
渡邊義浩 監修『中国王朝四〇〇〇年史』新人物往来社、2012年。
林診奈夫『中国古代の生活史』吉川弘文館、2009年。
浜本隆志『窓の思想史』筑摩書房、2011年。